| | |
|---|---|
| 氏名（本籍） | フェヒミユ・ファティ（トルコ） |
| 学位の種類 | 博士（音楽） |
| 学位記番号 | 乙第７号 |
| 学位授与年月日 | 令和２年３月１９日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第３条第４項 |
| 学位論文題目 | コンピュータ音楽におけるポリスタイリズム導入の可能性に関する研究 |

学位論文等審査委員

| | | | |
|---|---|---|---|
| （総合審査） | 委員長 | 准教授 | 三浦　雅展 |
| | | 教授 | 久保田　慶一 |
| | | 教授 | 古川　聡 |
| | | 教授 | 菊池　幸夫 |
| | | 教授 | 今村　央子 |
| | | 教授 | 吉成　順 |
| （演奏審査） | 委員長 | 准教授 | 三浦　雅展 |
| | | 教授 | 菊池　幸夫 |
| | | 教授 | 今村　央子 |
| | | 准教授 | 今井　慎太郎 |
| | | | 菅野　由弘　（早稲田大学理工学術院・基幹理工学部教授） |
| （論文審査） | 委員長 | 准教授 | 三浦　雅展 |
| | | 教授 | 久保田　慶一 |
| | | 教授 | 古川　聡 |
| | | 教授 | 吉成　順 |
| | | | 柿沼　敏江　（京都市立芸術大学名誉教授） |

---

審査結果の要旨

審査所見

学位審査委員会は、申請者　フェヒミユ・ファティの学位申請論文に関して厳正に審査を行った。以下に所見を記す。

本研究はロシアの作曲家アルフレート・シュニトケが打ち出した「ポリスタイリズム（多様式主義）」をコンピュータ音楽としてどのように実現できるか、その可能性を実際の作品の創作によって検証したものである。ポリスタイリズムは主にシュニトケとの関連で論じられる概念で、異なる２つ以上の様式を１つの作品に混在させることと、それによって得られるコントラストの強調や新しいアイデアが得られる現象であると説明されている。申請者はポリスタイリズムをコンピュータ音楽、特に Max/MSP を用いたインタラクティブ・アートとして実現し、それによってどのような効果が得られるのか、について自ら作曲し、その演奏を通して検討している。

修了リサイタルは、2020 年 3 月 3 日午後 2 時半より、国立音楽大学６号館１１０スタジオで行なわれ、４つの作品が演奏された。1 曲目は<<Black Bones for Percussion and Computer

打楽器群とコンピュータのための黒骨>>、2 曲目は<<Death Kings for Saxophone and Computer ソプラノ・サクソフォーンとコンピュータのための死する王>>、3 曲目は<<Whisper for Mezzo Soprano, String Quartet and Computer メゾ・ソプラノ、弦楽四重奏とコンピュータのための囁き声>>、4 曲目は<<Obscura Lacrimae for Piano and Computer ピアノとコンピュータのための暗闇の涙>>であった。いずれもコンピュータによる処理を併用しており、グラニュラ合成、サンプリング、フィードバック、周波数シフト、振幅変調、ディレイ、リバーブなどの技術を用いたコンピュータと演奏者による演奏スタイルであった。審査結果は以下のようなものであった。演１）楽曲と演奏はどれも響きがよく、完成度が高い。また、PA およびコンピュータパートのミックスバランス等についても、総じて高いレベルで実現されていた。とくに《囁き声》のウイスパーボイスを用いた部分は、PA を用いなければ実現不可能な表現であり、ハウリング等の危険性も克服しながら、楽器パートとコンピュータ音響信号処理による音色的拡張の組み合わせについて独創的であり、音楽的に成功していた。演２）全ての曲においてアコースティックなエクリチュールとしての完成度は高い。クラシカルな意味で響きの美しさが秀でていた。演３）４作品いずれも３～５つのセクションを並列的に捉え、異なるスタイル、音響の対比を図っていた。そしていずれも最初に提示されたテーマが最後のセクションで回帰する形で終結を導いていた。一方で、いくつかの問題点も指摘された。演４）コンピュータと奏者の兼ね合いにもう一つ「何か」が欲しい。奏者の演奏に対してコンピュータがパッシブな動作に限定していた。演５）アコースティックとエレクトロニクス間のポリスタイリズムは聞き取りにくかった。コンピュータによって異なる音楽スタイルを別様に繋げる、あるいはコントラストを高めているようには聞こえなかった。演６）全ての曲でセクションが並列的、ポリスタイリズムがそのまま各部の特徴という点では扱いが似通っていた。

その後、同日の午後５時より国立音楽大学６号館１１１スタジオにて論文口頭試問が行なわれた。提出された論文は 100 頁にわたって書かれており、序論では研究の動機や先行研究について触れ、第１章ではポリスタイリズムの歴史、第２章ではポリスタイリズムとシュニトケについて述べ、第３章では電子音楽・アナログ時代におけるポリスタイリズムの可能性と題して、ブルイネルの作品とクラムの作品について述べている。第４章ではコンピュータ音楽・デジタル時代におけるポリスタイリズム導入の可能性と題して、Max/MSP について述べ、リッピの作品と萊孝之の作品について述べている。第５章では、申請者自身が作曲した４曲について述べ、コンピュータ音楽におけるポリスタイリズム導入の検証について述べている。主な評価は以下の通りであった。論１）提出された論文ではその構成と内容について、申請者の長年にわたる調査と実験について詳しく述べられている。先行研究も多くはシュニトケの作品においてこのポリスタイリズムがどのように実現されているかを分析している。特にシュニトケの作品の分析から始め、そしてブルイネル、クラム、さらにはコート・リッピと萊孝之の作品へとポリスタイリズムの視点から考察を進めている。ポリスタイリズムを述べる上で、その歴史観点から述べている点は重要である。論２）3，4 章で引き合いに出される先行作品の選択が恣意的であり、選出基準が明確でない。さらに「ポリスタイリズムと思われる作品を分析したら確かにポリスタイリズムだった」という論法もマッチポンプ的で客観性に乏しく、論文としての説得力に欠ける点である。それらを受けて置かれる 5 章の内容も、個人的な創作ノートとしての興味深さはあるものの、学術論文が備えるべき客観性や研究史上の意義という点で主張が弱いと言わざるをえない。とはいえ、ポリスタイリズムをコンピュータ音楽に応用する際の技術的工夫や効果的なポリスタイリズムを実現するための作品構成上の工夫などの点では広く共有できる知見もあり、それなりの意義はあると思われる。論３）専門用語の説明に問題がある。例

えば polystyle と polystylism の違いが明確でない。「引用」「コラージュ」「模倣」の違いも明確に述べられていない。また、「ジャンル」「スタイル」についても明確に述べられていない。さらに論文の要旨と序論が読みにくい。論４）Max/MSP というプログラムによるインタラクティヴなコンピュータ・システムを使っているが、インタラクティヴな操作そのものは、新しいことではなく､既存のスタイルをこのようなシステムを使って操作することの意義について、詳しく説明を追加する必要がある。

以上のように、論文においては多数の問題点が指摘され、今後の研究課題が示された。論２の指摘については、提案手法の検討手法についての今後の議論につながるといえる。論３については専門用語についての説明を十分に強化する必要がある。例えば類似している用語の説明を用語集として付録で追加し、それぞれの用語が概念としてどのように異なるのかを明確にした対比表が求められる。論４では、Max/MSP を用いた理由について説得力のあるもっともらしい説明が論文に追記される必要がある。このように問題点は散見されるものの、申請者は回答を口述試験において適切に説明しており、その内容を論文に記すことによって解決できると判断できた。

以上のように、フェヒミユ・ファティ氏の修了リサイタルと博士学位申請論文は、国立音楽大学大学院博士後期課程のディプロマ・ポリシーに照らして、「博士（音楽)」の学位に相応しいと判断した。